

「いずれは死なねばならぬから」 ——フロイトの『快原理の彼岸』とディケンズ

松本 靖彦

ディケンズはフロイトの『快原理の彼岸』(1920)を読んでいたに違いない。¹ ジジエクならこう表現するであろう両者のテキストの局所的な類似性を指摘するのが本稿の目的である。周知のように、『快原理の彼岸』はフロイトが初めて「死の本能」を発表した論考である。「生命あるものはすべて内的根拠に従って死に、無機的なものへと帰ってゆくということ」を前提とした上で、彼は「あらゆる生命の目標は死」であると断定する(92)。そして、死への直行を余儀なくさせる危険な筋道を回避し続け、いわば死への回り道をする過程としての有機体の生を描き出した。この「死への迂路」(小此木 65, 67)をとりながら「無機的なものへと帰ってゆく」というプロセスは、礼拝堂の静寂に同化してゆくかのように穏やかで緩慢な死を迎える『骨董屋』(1841)のネルの最期そのものである。その一方で、数々の窮地から逃げ切り理想の死に場所を見つけたネルは、救貧院を何より恐れ、死に至るまで自立と尊厳を守り続けた『互いの友』(1865)のベティ・ヒグデンとともに、「有機体はただ自分のやり方でのみ死のうとするのである」(93)という『快原理の彼岸』の重要なテーゼを体現しているといえる。また、『快原理の彼岸』には、フロイトの孫がやっていたという、糸巻きを使った *fort-da* 遊びが登場する。フロイトはその遊びの内に「状況の主人」になろうとする「制圧欲動」を読みとるのだが(65-6)、冒頭から結末に至るまで登場人物たちが「行ったり来たり」「消えたり現れたり」を繰り返す『互いの友』は、つまるところ *fort-da* が生み出すドラマを扱った小説だといえる。以下の本稿では、まず『骨董屋』においてネルの死が明かされるまでにかかった長い時間の内に、読者への焦らし以外の意味を探り、次に『互いの友』がいかに徹頭徹尾 *fort-da* に貫かれた物語であるかを示したい。

1. 焦らしの裏側——ヒロインの緩慢な死

往時のディケンズ作品の人気を彷彿とさせてくれる神話的エピソードの1つに、『骨董屋』のヒロイン、ネルの運命に関するものがある。『骨董屋』は週刊誌『ハンフリー親方の時計』（以下『時計』）に連載されたが、大西洋の彼方アメリカで物語の続きを待ちわびていた人たちが、ニュー・ヨークに入港してきた船に向かって、「ネルは死んだか？」と尋ねたという話がそれである（Johnson 304）。

アメリカに限らず、『骨董屋』の愛読者たちがしびれを切らしたのも無理はない。ヒロイン、ネルの死が仄めかされてから彼女が遂に永眠したことが明かされるまで、彼らは2カ月以上も待たされるからである。『時計』第35号（『骨董屋』第54, 55章）では、その先ネルの命が長くはもたないことを示す状況証拠が十分に与えられている。第54章の終わりでは、おじいさんがネルの死を意識し始めていることが示されているし、第55章では、彼女にひととき優しく接するようになった周囲の人たちの態度の内に、彼女に迫りくる死の影が間接的に描きこまれている。ある学童は涙ながらにネルが「まだ天使になっていない」ことを確認しにやってくる。彼は「ネルは鳥が歌い始める前に天使になるだろう」と人々が話しているのを耳にしたのであり、それは彼女の命が春までもたないことを示唆している。美しく聡明な彼女の噂を聞きつけ、鄙びた教会に日ごとに押し寄せる来訪者たちの態度にも、まるで弔問客のような恭しさと悲哀がこもっている。少なくともネルの姿を目にする登場人物たちの、そして読者の心情においては、彼女の死はすでに秒読み段階に入っているといっていよう。

第55章を締めくくるエピソードも不吉である。老齢の墓掘り男が教会の地下にある古い井戸の脇までネルを連れてゆき、彼女に井戸の底を覗き込むように勧める件である。「墓そのものに見えるのう」とこの老人が言うとおりに、この井戸はまさしく墓に他ならない。「まっ黒で恐ろしいところ！」(413) とネルは言うが、挿絵を見ても、老人が指差す先にあるのは、奈落の底に通じるかと思われる漆黒の闇である（図1）。この地上においてネルの前途に希望の光はないのである。この挿絵はまた『クリスマス・キャロル』（1843）で、スクルージが未来の精霊に自分の死を予告される場面の挿絵を想起させる（図2）。要するに、この場面ではネルに死が宣告されているに等しく、しかも残された時間は長くはない。



図1 墓のような井戸



図2 スクルージの墓

(図版出典はいずれも *The Oxford Illustrated Dickens*. London: Oxford UP.)

ここまでネルの死についてはっきりとした予告がなされた後、物語の舞台は次号からロンドンに移り、ディック・スウィヴェラーの視点を核に、キットがクウィルプとブラス兄妹の策略で無実の罪に陥れられていく様子が描かれる(第56-59章)。キットは逮捕、投獄され(第60章)、裁判にかけられる(第63章)。しかし、ブラスたちの悪巧みの一部始終を盗み聞きしていた「侯爵夫人」とスウィヴェラーの活躍により彼らの陰謀は瓦解(第64-66章)、追い詰められたクウィルプも死ぬ(第67章)。晴れて無罪放免となったキットは、ガーランド氏、独身紳士とともにネルの元へと急ぐ(第68-70章)。彼らは『時計』の次号で発表される第71章でようやくネルの亡骸に対面することになるが、第35号(『骨董屋』第54, 55章)でネルの死が予告されてから、彼女の死が明か

されるまで9週間も経過している。

さぞかし『骨董屋』の愛読者たちは焦らされたことであろう。『オリヴァー・トゥイスト』(1838)の語り手が第17章冒頭で語っているように、シリアスな場面とコミカルな場面を交代させるというメロドラマの技法を知悉したディケンズのことだから、ネルの死の予告の後に道化的なスウィヴェラーが登場するのは作劇の技法としては常套手段だといえる。それにしても、ネルを実在の子どものように感じ、彼女の身の上を案じるがゆえに、ネルの安否に関する続報を待ちわびていた熱心な読者たちは、かなりのお預けを食わされたといえる。チェスタトンが「ネルの首に長いことロープをかけたままにしておいた」ディケンズを皮肉る所以である(54)。

もちろん、このお預け——結末までの過程の引き延ばし——は作為的なものである。J・メッキヤーも指摘しているように、ディケンズはネルの死が読者にとって最も衝撃的となり得るタイミングまで、彼らを焦らすサスペンス状態を保っておこうとしたのである(199)。

とはいえ、少なくとも第67章までを読む限り、(結果的にそうしているのだが)ディケンズがあからさまに結末を先延ばしにしている印象は薄い。既にみたように、ネルの死が予告された後、ロンドンを舞台とする第56章から第67章までにはプロット上重要な出来事が目白押しなので、作者は単なる時間稼ぎに徹しているわけではない。キットやスウィヴェラーが陥る窮地がネルの元へとはやる読者の気持ちを焦らすのは確かだが、その分スウィヴェラーと「侯爵夫人」に活躍の場が与えられるのである。また、第66章以降、悪役たちも片づけられていく。さらに、第63、64章には、病に倒れたスウィヴェラーが危うく一命をとりとめるという、ネルの運命への伏線(かもしれないもの)が敷かれている。それは、メッキヤーが指摘するように、脇役の身に起こったことをヒロインの運命の予兆として受け取ることが可能ならば、あれだけはっきりと死が予告されたネルも最後に回復するかもしれないからであり、だからこそディケンズが仕掛けたサスペンスには「どちらに転ぶか最後までわからない」(200)という力がある。ディケンズは、ネルなしでも読み応えのあるドラマを構築しつつ読者を焦らしたのである。

ディケンズがあからさまにひどい焦らし方をしているのは第68章以降である。とはいえ、第67章と68章は同じ『時計』42号に載っているので、彼の設けたサスペンスは『時計』第43号において際立っているといえる。キットたち

一行がようやくネルのいる村に到着するのにもかかわらず、この号を最後まで読み終えても、キットがネルのいる（と思われる）家に入っていくところで終わるからである。ここまでネルに接近していながら、読者は更にまた一週間お預けを食らうのである。ここまで緊張状態を長く引き延ばされた揚句にネルの死を知らされたならば、嬉しいどんでん返し — 病死の淵から生還したスウィヴェラーのようにネルも生き延びること — を期待していた読者が憤慨したとしても無理はない。

このディケンズによる焦らしと表裏一体になっているのが、ネルが迎える緩慢な死である。A・サンダースは「ネルは死ぬのに不当なほど時間がかかっているようだ」（89）と述べているが、結末が先延ばしにされるおかげで、ネルは人知れず — 枕元で見守っていたトレント老人でさえ彼女が息をひきとったのに気づかずに — ゆっくりと平穩の内に死んでいくことができるのである。

これはネルの望みどおりの死に方だったと思われる。第52章の初めの段階で、彼女は既に自覚的に死に向かっている。自分の短い生涯を終えることになる村に到着し、住まいとなる家に案内されたとき、彼女は「静かで幸せな場所 — 生きて、そして死ぬのを学ぶのにいい場所だわ！」（386）と感激するのである。これはとりもなおさず死を目標と定めた生き方である。ほどなくして彼女は中世の騎士たちも眠る礼拝堂の一隅に心が休まるお気に入りの場所を見つけ、そこで長い間座って物思いに耽るようになる。死に向かっているネルが、死者たちに囲まれて静かに時を過ごす内に到着点である死に思いを馳せるのは当然だといえる。

What if the spot awakened thoughts of death! Die who would, it would still remain the same; these sights and sounds would still go on, as happily as ever. It would be no pain to sleep amidst them. (398)

彼女が思い描いているのは、礼拝堂の静謐な佇まいに同化していくように自然で、眠りにつくように安らかな死であるが、トレント老人の証言によれば、彼女は実際にいつ死んだのかわからないほど穏やかな死に方をしている。

このように死の静寂に同化していくような死に様を、生命の最も本来的な死に方として構想していたのが、『快原理の彼岸』のフロイトである。ネルの死に方は、フロイトが描いている「無機的なものに帰ってゆく」生命の姿に重なる。

生命あるものはすべて内的根拠に従って死に、無機的なものへと帰ってい

くということ、例外なき経験として仮定することが許されるなら、われわれは次のようにしか言いようがない。すなわち、あらゆる生命の目標は死であり、翻って言うなら、無生命が生命あるものより先に存在していたのだ、と。(フロイト 92)

ここでフロイトが思い描いている死の流儀に概ね従って「無生命」状態に「帰って」いるのがネルなのである。もちろん、病を得て衰弱しているネルは純然たる内的根拠に従って死ぬわけではないが、田舎の村に落ち着いてからは攻撃性や危険に晒されることで生命を脅かされることはない。彼女は死を目標として日々を暮らし、遺跡のように生氣のない礼拝堂の環境に同化していく。

また、もう少し長い期間で眺めてみると、ロンドンを脱出してからのネルの運命は『快原理の彼岸』のフロイトがいう「死への迂路」そのものだったことがわかる。第15章でおじいさんと一緒に骨董屋を夜逃げ同然で出奔してからというもの、紆余曲折を経て田舎の村に導かれるまでのネルの足取りは、彼女の生を暴力的に脅かすものから逃げ続ける過程だった。彼女はクウィルプの魔の手から、貧困のために身を持ち崩さざるを得ない窮地から、おじいさんの賭博熱を再燃させかねない局面から、人間の生命を吸いつくしてしまう産業社会の酷薄さ、等から逃げ続け、遂に「静かで幸せな」死に場所 (A quiet, happy place) にたどり着いたのだった。この逃避行は、あたかも「死への迂路」としての生というフロイトの思弁を物語化したかのようなものである。

結局のところ、有機体はただ自分のやりかたでのみ死のうとするのである。……生きた有機体は、その生の目標に短い道のりで (いわばショートカットで) 到達させてくれる働きかけ (すなわち、危険) には、あらん限りの力で反抗する…… (フロイト 93)

ネルにとって、ロンドンやクウィルプの手の届く範囲、子供がごみのように死んだまま放置されている町などに留まることは、暴力的に生命を損なわれる危険に直結した選択であり、望ましくない形での死への「短い道のり」を意味した。それら死への近道からネルは必死で逃げ続けたのである。道のあまりの侘しさに怖気づき、「他の道を行くわけにはいかないのかい？」と尋ねるトレント老人に、ネルは以下のように毅然と答えている。

“Places lie beyond these,” said the child, firmly, “where we may live in peace, and be tempted to do no harm. We will take the road that

promises to have that end, and we would not turn out of it, if it were a hundred times worse than our fears lead us to expect. [. . .]” (334)

平穩に生きていける — 望ましい死に方をする事ができる — 場所をストイックに目指し、その目的地へ確実に通じている道以外をネルは徹底的に回避する。たとえ困難を伴う道であっても「自分のやりかたでのみ」死ぬことにネルは拘泥したのである。このように、平穩な死に向かって逃避行を続けるネルの姿は、フロイトが論じている有機体の理想的な死に方に重なるのである。

従って、フロイトの思弁を体現するかのよう「込み入った回り道」(フロイト 93) を続けたネルが、最期に至るまで近道をとらず、緩慢なプロセスを経て死を迎えていくことにも意味がある。彼女の生命は決して暴力的にその結末へと急きたてられることなく、極力「内的根拠に従って」、ゆっくりと「無機的なもの」へと移行していくのである。その結果、前述したように、彼女は自分の望み通りの安らかな死に方をするのであり、これは消極的ながらも1つの目標達成だといえる。ネルは「首にロープをかけられたまま」長いこと放置されていたわけではないのである。言い換えれば、そもそも紆余曲折の末わざわざ時間をかけて死んで行くのが生命本来の流儀だ、という『快原理の彼岸』の観点に立てば、ネルはその流儀通りに回り道の末ゆっくりと死んでいるといえるのであり、ネルの生死が未決のままだった例の9週間という期間もメッキャーのいうサスペンスや作者による焦らし以外の意味をもちうるのである。

2. 去来と浮沈 — *fort-da* 物語としての『互いの友』

『互いの友』は、行ったり来たり、浮かんだり沈んだり、捨てたり拾ったりの話である。金持ちか貧乏人かに関わらず、老若男女がロンドン(周辺)を行き来し、居なくなったり現れたり、川に捨てられたり拾われたりする。救貧院から逃げ回るベティ・ヒグデンは、ロンドンを発つ際ボフィンたちに向って、「私は行ったり来たりする (I shall be to and fro)」ので、またお顔を拝みに来ますよ、と言う (385)。株式取引に狂奔する御仁たちもロンドン—パリ間を忙しく行き来する (114)。

これら一連の「行ったり来たり」が何に似ているかといえば、フロイトの『快原理の彼岸』に出てくる *fort-da* 遊びである。紐をつけた糸巻きを放り投げて「いない! (*fort!*)」と叫び、紐を使って糸巻きを手繰り寄せては「いた! (*da!*)」と叫んでいる子どもを目撃したフロイトは、これは母親の不在を埋め合わせる

ための、象徴的な情況操作だと考えた。つまり、糸巻きを使って在／不在を自由自在に操ることで、母親がいないという不快な状況を心理的に克服しているのだ、と。この子どもが自分の鏡像を消す遊びにも興じている様子をフロイトが報告している通り、「いないいない—ばあ」も *fort-da* 遊びの変種に他ならない。重要なのは、安寧を脅かす危険な揺さぶりが *fort-da* の象徴的な揺さぶりによって制御されていくことである。

揺さぶりこそは『互いの友』という物語に何より特徴的なものである。登場人物たちは上述の糸巻きのように、文字通り放り投げられたり、引き摺り寄せられたり、そうでなくとも突然の境遇の変化に激しく弄ばれる。主役級（あるいは善玉）の人物たちには、不愉快な（あるいは危険な）状況に放り込まれながら、その揺さぶりの主導権を掌握したり、揺れの只中で態勢を立て直していく者が多い。物語が始まる前に暴力的に主役の場から放り出され、死んだ (*fort*) ことにされてしまったジョン・ハーモンは、その状況を逆手に取って身の振り方を思案する。彼を脅かす様々な揺さぶりは、素性を偽った彼が戦略的に続ける「いないいない—ばあ」の内に平穏に回収されていく。ベラ・ウィルファーは、ジョンとの絆を確かにしていく過程で、彼の抱擁の中にすっぽりと身を埋め、父親のR・ウィルファーの目の前で「消失」と「出現」を繰り返す (606-10)。一方、ブラッドリー・ヘッドストーンに襲われ、テムズ河に投げ捨てられたユージーン・レイバーンの意識は、彼がリジーに拾い上げられた後も、人事不省 (*fort*) と束の間覚醒 (*da*) との間を揺れ動く。彼の生命は病床で此岸と彼岸の間を行ったり来たりしながら、「妻」(=リジー)に繋ぎ留められていく (753)。何事にも性根を据えることのできない無責任男だった彼は、リジーに制御されることを通じて倫理的に覚醒する (*da*) ののである。

揺さぶりの主導権を掌握するための *fort-da* の効力が端的に描かれているのが、ベティ・ヒグデンの最期である。救貧院に収監されることを恐れてあちこち逃げ回っていたベティは、死期が近づくと明滅による秒読みが始まったかのように頻繁に「無感覚」状態 (*fort*) と覚醒状態 (*da*) のサイクルを繰り返していく。これは彼女がこの世からいなくなるに際して、その最終的な *fort* のためのリハーサルをしているかのようでもある。そして、リジーが彼女を抱き起こそうとすると、抱き起こされた瞬間に自分が力尽きることを悟った彼女は、上半身を起こしてもらおう「離陸」の瞬間を「まだ」「まだ」「さあ、起こして」と自己決定する。その結果、ベティはまるで死ぬための最高のタイミングを「1、

2の3！」で計ったかのような、本人も納得のいく尊厳死を迎える（513-14）。ネル同様、救貧院という死への危険な近道を回避し続けたベティは、*fort-da* を通じて「ただ自分のやりかたで」死んだのである。

一方、*fort-da* が何の益ももたらさない人物たちがいる。ヘッドストーンは、激情の暴発を抑えながらリジーにしがみつくような求愛をする際、「もう一回り」「もう一回り」と墓地を連れ回して、彼女の気持ちに揺さぶりをかけようとするが、無論成功しない（396-98）。また、生死に関わる揺さぶりがちっとも骨身に応えないライダーフッドのような悪党もいる。舟からテムズ河に投げ出され溺死しかけた彼は、男たちの懸命の介抱によって一命をとりとめるのだが、それでも人に疎まれる汚れた生き方を一向に改めようとはしない。だが、自分の娘の他には誰からも愛されない彼の存在が *fort-da* の揺らめきに凝縮される彼の蘇生場面こそは、この物語の大きなクライマックスだといえる（444-45）。C・ギャラガーは、この場面において生命が身体から分離している限りにおいて価値をもつ点に着目するが（356）、普段は彼を忌み嫌う男どもが「紛れもない生命の証（An indubitable token of life!）」（Dickens, *OMF* 444）に涙を流すのは、それが単にライダーフッドから切り離されているからではない。その命の灯が生死の瀬戸際を揺れ動いているからこそ、その掛け替えの無さが剥き出しになるのである。いましも永久に失われるかもしれない不安定な状態で明滅しているからこそ、その命が誰のものだからというのではなく、皆に貴ばれる——つまりは「われらの共通の友」となる——のだ。これは福音書の「無くした銀貨」の譬（「ルカ」15:8-10）にあるように、「なくなっていたのが見つかった」がゆえに価値が前景化される *fort-da* の異化効果だといえよう。そのことを知ってか知らずか、ジェニー・レンはライアが「パブシー商会」の屋上に設けた「庭」で、生きるためには死ね、と呼びかける。「上がって来て死になさい（Come up and be dead!）」（282）と。

傍役たちもめいめいが *fort-da* 遊びに関わっている。ヴィーナス氏とジェニー・レンはいずれも、断片を集め、分類し、それらを取っ換え引っ換え取捨選択して、「人形」の全体へと接ぎ合わせていく作業に熟練している。ボフィン^{ひとがた}を牛耳ったと自惚れるウェッグは、扉越しに気ままにボフィンを召還し、「行ったり来たり」させて悦に入る（660-61）。幼児的自己防衛によって自らを囲い込んでいるポズナップ氏は、認めたくないものは「非英国的」だと言って払いのけ、「若い令嬢」の頬を赤らめさせそうなものは予め閉め出してしまう。都合の悪

いことはないことにしてしまう (*fort*) わけである。秘めたる善良な意図から酷薄な人間を演じ続けたボフィンの「いないいないーばあ」とは対照的に、フレッジビーやラムルは策謀や欲得のために善人の皮を被って暗躍する。じきに正体が暴露されて失墜するけれども。

この小説の主な登場人物たちは、塵芥のように篩にかけられ仕分けされる。この「仕分け」はジョンとベラが結婚する辺りから本格化し、自らが投げ込まれた境遇において座りの悪かった人物たちは、めいめいに揺さぶられた挙句、それぞれ振り分けられた役柄にはまってしまう。ジョン・ハーモンの逡巡、レイバーンの倦怠、ベラの金銭欲は振り落とされ、性悪な老ハーモンの遺産は清められる。その一方で不穏な人物たちは文字通り廃棄される。きれいに片付けられていく塵芥の山のように、登場人物たちは最終的に2つのグループに分別されるのである。更生可能な善男善女は不安定な状況に投げ込まれた後 (*fort*)、再び社会の中に自らの居場所を見出すことができるが (*da*)、ボフィンにつきまっていたウェッグは家庭の団欒の外へ投げ出されて終わる (*fort*)。

登場人物たちを襲った危険な揺さぶりが徐々に制御されていく物語『互いの友』の結末は、保守的なものである。執筆中に鉄道事故に遭い、危うくこの世から放り出されるところだった作者自身、自らの心身を襲った暴力的な揺さぶりを制御する必要があった。この小説の語り手が、「それが命に他ならず、彼らも今は生きていて、いずれは死なねばならぬから (because it *is* life, and they are living and must die)」(443; 強調は原文による) と述べているように、結局のところ人間の一生は順序が逆転した一度限りの *fort-da* 遊びなのである。この事実が剥き出しになったとき、あらゆる人間の命が「われら互いの友」となるのである。

3. フィクションの終結と生命の終わり

以上、本稿はフロイトの『快原理の彼岸』とディケンズの2作品の相似点を提示してきた。両者の描き出すものが似通っているのは、彼らが結局は同一の対象を見据えているからであろう。論証の手続きの一部として文学作品を援用するフロイトは、『快原理の彼岸』においても詩人たちの作品に言及しているが、彼は「無機的なものに帰る」生命については『骨董屋』のネルを、また *fort-da* のいわば「症例研究」として『互いの友』を引き合いに出してもよかつたはずである。

その「同一の対象」とは死である。死とは生の出自ではないのかと勘繰り始める『快原理の彼岸』のフロイトも、『骨董屋』のネルに軟着陸のような安らかな息の引き取り方をさせるディケンズも、ともに生と死の連続性に着目している。死とは抗うべき相手ではなく、(そこに直行してはならないという意味において) 遠ざけつつも究極の目標として目指すべき状態なのである。

一方、*fort-da* 物語『互いの友』は死をどのように捉えているだろうか。

T・イーグルトンは *fort-da* を「何かが失われ、そして取り戻される」という最小単位の物語と捉え、複雑極まりない物語でもそのモデルの応用なのだ、と論じている (160-61)。確かに、推理小説の要諦はまさしく *fort-da* だし、聖書にしても雲隠れと降臨を繰り返す神と人間とが繰り広げる壮大な隠れん坊の歴史を綴った物語だと言えないこともない。そして、もちろん人の一生もまた *fort-da* である。この世に投げ出された後に、次第に自意識が芽生えていく存在であるという意味においても、また既にみたように、この宇宙に束の間現れた後に消えていく存在であるという意味においても。

この「いったんは始まるが必ず終わる」という点において、フィクションと生命の形式は似ている。既に触れたように、ディケンズは『互いの友』執筆中に鉄道事故に遭って命拾いをしている。従って、とりわけこの作品の後書きにおいて、彼が事故当時を思い返しながらかつフィクションの終結と生命の終りを重ね合わせていることには意味がある。

I remember with devout thankfulness that I can never be much nearer parting company with my readers for ever, than I was then, until there shall be written against my life, the two words with which I have this day closed this book:—THE END. (822)

結局のところ、「互いの友 (Our Mutual Friend)」とは、この物語の作者も読者もひっくるめて、生き物のすべてが例外なくいずれは必ず出会うことになる、死そのもののことなのかもしれない。

注

- 1 『リチャード二世』を論じる文脈で、ジジエクは「疑いなくシェークスピアはラカンを読んでいた」(9) と言っている。

引用文献

- Chesterton, G. K. *Appreciations and Criticisms of the Works of Charles Dickens*. London: Dent, 1911.
- Dickens, Charles. *Our Mutual Friend*. 1966. London: Oxford UP, 1974.
- . *The Letters of Charles Dickens*. Ed. Madeline House et al. Vol. 2. Oxford: Clarendon, 1969.
- . *The Old Curiosity Shop*. 1966. London: Oxford UP, 1975.
- Eagleton, Terry. *Literary Theory: An Introduction*. 2nd ed. Minneapolis: U of Minnesota P, 1996.
- Gallagher, Catherine. "The Bio-Economics of *Our Mutual Friend*." *Zone: Fragments for a History of the Human Body*. New York: Urzone, 1989. 345-65.
- Johnson, Edgar. *Charles Dickens: His Tragedy and Triumph*. Vol. 1. London: Victor, 1953.
- Meckier, Jerome. "Suspense in '*The Old Curiosity Shop*': Dickens' Contrapuntal Artistry." *The Journal of Narrative Technique* 2.3 (1972): 199-207.
- Sanders, Andrew. *Charles Dickens Resurrectionist*. New York: St. Martin's, 1982.
- Žižek, Slavoj. *Looking Awry: An Introduction to Jacques Lacan through Popular Culture*. 1991. Cambridge, MA: MIT, 1992.
- 小此木啓吾. 『フロイト思想のキーワード』. 東京：講談社, 2002年.
- フロイト, ジグムント. 「快原理の彼岸」. 須藤訓任訳. 『フロイト全集 17』. 新宮一成他編. 東京：岩波書店, 2006年. 53-125.

